

2014 年度後期「グローバル人材論 I」（金 5、4 号館 1 階特別教室）

この授業は、現在、ビジネス、国際機関、国際協力など、国際協働社会の第一線で活躍している日本人を学外講師としてお招きして、各分野の最前線でどのような活動が行われてきたか、最新の情勢がどのようになっているかを紹介します。これまでの現場体験の談話を通して、現代社会の実態を紹介すると同時に、今後の国際社会を担う次世代学生たちに助言とメッセージを提示します。

回	月日	担当者	講義題目
1	10月3日	福田・河	イントロダクション
2	10月10日	大橋 正明 	国際協力 NGO シャプラニールの 4 2年間 シャプラニール=市民による海外協力の会は、1971年に独立したバングラデシュの復興を手伝った青年たちによって1972年に創設された老舗の国際協力 NGO である。このシャプラニールはこれまで42年間、バングラデシュの貧困削減を目指して農村や都市で活動してきた。しかしその過程で、支援対象の村人に襲われたり、一緒に働く現地スタッフが長期ストライキを行うといった大問題に何度か直面した。そうした機会をばねにして、日本人が果たすべき役割を巡った議論を行い、協力の在り方を改良してきた。本講義では、その変遷を明らかにする。
3	10月17日	岩崎 裕保 	開発、開発教育そして ESD(持続可能な開発のための教育) Development means better life. Development is sharing happiness.という視座から、「開発」とは何かを考え、「開発教育」が取り組もうとしてきたことを分かち合い、ESDの可能性を探ります。
4	10月24日	山西 優二 	国際教育・グローバル教育の視点からみるグローバル人材論の検討 グローバル化が進展する中で、そのグローバル化に対応した人材論そして教育論が、産業界そして文科省などを中心に語られつつある。本講義では、1980年代にみられた「国際化対応の教育」と「国際教育」の関連を批判的に読み解きつつ、今の「グローバル化対応の教育」と「国際教育」「グローバル教育」の関連について検討する。さらには「グローバル」をめぐる各国の教育動向に関する比較研究や教育実践についても触れ、改めて平和・共生に向けての人間のあり様そして教育のあり様について考える。

5	10月31日	阿部真理子	<p>地方の NGO による震災支援と国際協力</p> <p>東日本大震災において、</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. NGO はどのような活動を行ったのか？ 2. 被災地に近い NGO の役割とは？ 3. 活動資金をどのような形で確保していったか？ 4. 活動者として IVY ニュースの大学生は何を担ったのか？ 5. 海外における支援活動とのつながり 6. 国内における NGO による災害支援活動の将来的な展望 7. 地方の NGO の置かれている状況の分析と課題 <p>などの観点から考察する。</p>
6	11月7日	<p>杉澤 経子</p> 	<p>多文化共生の社会づくりに求められる人材像</p> <p>1990年の入管法改正に前後して、全国的に外国人住民の定住化が進んできている。各自治体には、「多文化共生」政策の策定が要請され、日本語教室や外国語相談などの事業が実施されるようになるが、果たして「多文化共生」の内実はあるのかとの疑問も呈されている。本講義では、日本における多文化化の問題状況を概観した上で、多文化共生社会を実現していくための事業のあり方、およびその担い手としての人材の役割や専門性について、自らの実践を含めて紹介する。</p>
7	11月14日	福田・河	<p>振り返りとワークショップ</p> <p>受講学生をグループに分け、(各回後に提出したレポート等に基づき) 5講義のどれか1つを割り当てる。各グループは、(1)指定された講義の概要をまとめ、(2)講師との懇談・取材から深掘した情報を集約し、(3)講義や取材活動から、海外で成功裏に活動していくにはどんな力が求められるかについて論じ、(4)その論旨をまとめて、クラスに発表する。</p>
8	11月21日	<p>伊藤 俊介</p> 	<p>課題に取り組み、アイデアを形にする</p> <p>～国内外の実例から考える～</p> <p>私が所属する「アプカス」という国際協力 NPO(NGO)のスリランカや日本での活動の変遷を紹介しながら、開発途上国の貧困地帯や僻地農村、激甚災害の被災地にはどういったニーズや問題があるかに焦点を当て、「課題の改善や解決を目指すプロジェクト立案のエッセンスとは何か？」について実例を通して参加学生と考える。また、活動地の現場で垣間見える文化ギャップやなかなか味わえない体験談を織り交ぜて、国際協力や地域開発にまつわる「喜怒哀楽」</p>

			も学生に率直に伝えたい。
9	11月28日	<p>有田 典代</p> 	<p>日本の国際交流の変遷とこれから</p> <p>地域社会で取り組まれている多様な国際交流活動について、歴史の変遷とその特徴、意義をふまえながら、課題を考察し、これからのあり方を展望する。</p> <p>(時間的余裕があれば) 地域の国際化施策の変遷と課題、グローバル化社会に求められる視点と取り組みについて考える。</p>
10	12月5日	<p>富野 岳士</p> 	<p>日本のNGOの概要とその役割、NGOと企業の連携</p> <p>統計データを基に日本のNGOの現状を知ることで、日本のNGOの特徴(強み・弱み)を理解し、今後日本のNGOに求められる役割と課題について理解を深める。また、近年注目されているNGOと企業の連携について、NGOと企業の関係性の変化や最新の連携事例を学ぶことで、NGOと企業の連携の意義や目的、課題、連携のあるべき姿等を理解し、両者が連携・協働して地球規模課題の解決に取り組むことの重要性を認識する。</p>
11	12月12日	<p>河野 善彦</p> 	<p>体験的グローバル人材論</p> <p>過去46年間の職歴を振り返ると日本政府のODA(政府開発援助)実施機関、国際機関、民間助成財団、民間企業など職場は変遷したものの常に国際的な取引とかかわりがあったし、職場の同僚も日本人、外国人を問わずグローバル人材と呼ぶことができそうな人々であった。</p> <p>現在かかわりをもっているオイスカは1961年設立の国際協力NGOであり過去においても、現在も途上国の開発に献身する人材が多数輩出している。</p> <p>本講義は自分自身の体験や見聞、そして職場など身近な人々の生きざまなどを紹介しつつグローバル人材について考察していく。</p>
12	12月19日	<p>池田 誠</p> 	<p>国際ボランティア論</p> <p>国際ワークキャンプ、長期ボランティアプログラムなど、学生が海外でできるボランティアについての講義。また、実際に行われている大沼での環境保全ボランティアや、HIFの活動についても紹介をする。</p>
13	12月26日		(予備日)
14	1月9日	<p>米山 敏裕</p>	<p>インドの農村開発の現状とNGOの取り組み</p> <p>発展が著しいインドにあって農村部は自然条件が厳しく農業ができず、都市部に移住したり、出稼ぎに出る人々が多くなっている。</p>

			女性を対象にしてエンパワーメント活動が NGO によってすすめられている。インドには 750 万も組織されている自助努力グループ(SHG)があり多くの NGO が取り組んでいるが今回の講義では農村部において女性の社会的、経済的な環境がどのようになっているか、どのような差別、抑圧があるか、そしてその状況をいかに解決しているかを課題も含めて紹介し考えていく。
15	1月23日	福田・河	振り返りとワークショップ 受講学生をグループに分け、(各回後に提出したレポート等に基づき) 6 講義のどれか1つを割り当てる。各グループは、(1)指定された講義の概要をまとめ、(2)講師との懇談・取材から深掘した情報を集約し、(3)講義や取材活動から、海外で成功裏に活動していくにはどんな力が求められるかについて論じ、(4)その論旨をまとめて、クラスに発表する。
16	1月30日	福田・河	最終レポート提出 「これからのグローバルな活動で求められている力」

市民聴講生の参加

この授業は、国際語学センターが開催する特別公開講座として一般市民の方も毎回5名程度、聴講することがあります。